

---

# ロー・ティーン

青空女兄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロー・ティーン

### 【著者名】

青空文兄

### 【あらすじ】

中二。一月。受験だけを考える毎日。それが終わればもう卒業だけ。中学なんて居心地悪い。子供なんだ。みんな。皆も僕も。だから嫌。いやだいやだつ。いやなんだけど···。

「あ～、なんだよ」「れつ」

もつ、いやだ。

わかんない。やりたくない。

「おこにちやん、どうしたの？」

後ろで話し声がする。

妹とお父さん？

うるさいな。

なんだかお父さんが説明している。

ほつといで。

家族を不安にさせるよしな」としてゐるけど、  
でもしあがないじやん、解けないんだからこの問題！

なんだよこれ、なんで僕が解けないの？

階段を下りて居間に行く。

「休憩？」

お母さんが聞くけど僕はちょっとお菓子をねだつてから  
すぐまた部屋に戻った。

やりたくないけど受験勉強中だし。

今は2月。

もうすぐ受験日だ。

初めての受験。

やだなー、みんな入れればいいのに。  
なんでこんなことするの。

やだやだ。

僕は県で一番難しい高校を志望している。  
つまり一番成績良い生徒が行く学校。

そうとは限らない?

でも僕にとつてはそう。

高校なんて選ぶ基準ないじやん。

中学での成績に合わせて「入れる・入れない」を  
決めるだけじょ。

そこで僕は学年でも成績上の方みたいだから  
順当にそこに行くことになつたわけ。

決めた、とは言わないんじゃないかな。

だつて入れる成績があるなら上位校を目指すもんじょ?

そういうわけでそれほどすんごく不安ってわけでもないけど  
そりや初めての経験だから絶対安心なんて思わないわけです。  
だって「ふるい落とす」ためにするんでしじう?  
中学浪人なんて考えられないね。

万が一、って可能性があるだけでやっぱ怖いよ。

だから僕でも勉強する。

ふだんから真面目に授業受けてる僕でも。

わざわざ受験用に。

登校する。

もうすぐ卒業なのか。

そんなことより受験の方が目の前の重大事だけだ。

高校に行けばなにか変わるかな。

中学とは違つだらうか。

中学なんて小学校からの持ち上がり。

同級生だつたみんなが急に

学生服やセーラー服着だしてなんか「そばゆかつた。  
ほかの小学校からも入ってきたから

知つてる顔と知らない顔が半々だつたけどね。

しつかしなに？

部活つて入るもの？

そんでもたなんで運動部ばつか？

クラスの男子がござつてそこに入る。  
野球とかサッカーとかラグビーとか。

あー、うつせー。

野蛮。

部活の話ばかりだし。

それだけならまだしもちょっとかいだしてくる。  
なんて馬鹿なんだ。ここいら。

「なんで隠してんの一？」

いいでしょ、べつに。

「なんかあるんじゃないの一？」

体育で着替えてたときに

一人が騒ぐと同時にどんどんほかの男子も集まりました。

近づかないでよ！

恥ずかしいんだから。

ズボンなんてさつさと穿きかえたい。

パンツ見られたくないもん。

なんでそんなときを狙つて声かけてくるんだよ。

囮んでくる。

僕は背が壁。

うつくまる。

ここいら、サッカー部の連中？

馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！

輪の外でだれかが叫んでる。「やめやつ」って。

その隙に逃げた。

追いかけてくる。

馬鹿！

なんで！？

トイレに逃げる。

大の方に入つて鍵掛ける。

なんで？

うるさいあつちいけ！

上から覗くなよ！  
下から覗くな！

始業の鐘が鳴つてみんなクラスに戻つていった。  
もう、ほんとにイヤ！

一年生、

最初のテスト、

僕の点数はずいぶん良かつたらしい。

へえ〜。

普通に勉強してただけなのに。

小学校じゃ予習も復習もしてたでしょ、みんな？

どうから漏れたんだか

僕の成績に皆が触れてくる。

ガリ勉とか天才とか言つてくれる。

馬鹿か。

ガリガリなんて勉強してないよ。

普通にしてるだけでなんでそんなこと言われなきゃなんないの。  
みんながさぼってるだけでしょ。

部活ばっかやつてんの？

色氣づいてんの？

なんだか平和だった小学校時代に比べて  
中学校はざわざわしている。

「比較」が蔓延している。

やだなあ。

すつしょく安っぽいひとばかり。

比べる比べる比べる。

うらやみ？ 嫉妬？ 自慢？

じいじが田舎だから？

テレビや雑誌や本の中はそんなことない。  
すごい人、すばらしいことばかり。

大人だから？

ガキなんていやだ。

早く大人になりたい。

馬鹿なことばっかり言つてるこんな環境からはやく出たい。

僕は利用した。

せっかく優等生つて思われてんだから  
そうしどこつ。

「きみらとは違うんだ」つてことにしどもや  
なれなれしく近づいてこないだろ。

わけわからぬこと言つてきても  
アンタツチャブルになつてやる。

僕は特別なんだ。

特別だからきみらと同じことしないんだ。

同じ扱いしないで。

同じこと考へてると思わないで。

エッチなこと？

そんなのいつも氣になつてゐるよ。

辞書も医学書も見ちゃつてゐるよ。

「性」とか「陰」つて言葉見るだけで想像膨らんじゃう。

だけどそんな話したくない。

そんなナイーブな、恥ずかしいこと、

なんでわーわーしゃべつてんの、男子、馬鹿！

ねえ？

女子もやつ思ひよね？

いつもやつ言つてるよね？

なのになんで味方になつてくれないの？

野蛮な男子達は敵でしょ。

僕ら話合ひませうだよね。

男女の席は列レと交互。

一つの席はぴつたり付ける。

・・・ことになつてゐる。

離すんだ。この子。

なんで？

小学校同じだつたでしょ。  
昔から知つてゐるのに・・。

知らない。

知るもんか、こんな馬鹿な女。

下敷きには雑誌の切り抜き、  
アイドルなんか挟んでるし。

馬鹿みたい。

いつも名前呼んじやつて。

知るもんか。

部活は三年間、三つ入つた。  
ぜんぶ文化部。

なんでだろう？ ぜんぶ数カ月しかやってない。  
僕のせいじゃないもん。

そんな雰囲気だつたんだもん。

だけど三年生の時だけは  
ちょっとは続いた。美術部。  
秋の文化祭まではいた。

男少なかつたなあ。  
女の子多かつた。

でも静かな子ばかり。  
クラスの女子とは違うよ。

ずっと気になつてた朝賀さんとも同じ。

いつも家の部屋で思つてた。

「あつちが朝賀さんの家の方だなあ」

絵なんてあまり興味なかつた。

でも無部つてのもどうかと思つて入つた。

女の子達はみんな真面目に描いてる。  
一年生からやつてきてるんだもんね。  
真剣だしつまいよね。

一応部員だから

文化祭には美術部員としてなにか描かなきゃいけない。

めんどくせ・・。

油絵なんてわかんないし、  
描きたいものなんてないよ。

怒らないで！

顧問の先生に怒鳴られた。

しぶしぶ描いた。

それに専じてし。

初めてまとまに描いた油絵。

三年間の放課後はそんなことで、部活の記憶なんてあんまりない。

僕の放課後は本屋。

漫|画。

最後の授業終わつたらね、  
五分後には学校の敷地の外だよ。

まだ誰も出てきていらないグラウンドの横の細い道、一人で歩いたんだ。

だーれもいなーいグラウンドつてなんてさつぱりしてるんだろ?。校舎の外、

ほかの生徒もぜんぜんいない。  
学校で僕が一番。

みんなはクラスでうだうだしてるんだ。  
残ってるんだ。  
部活が始まるまで。

同じ部活の友達としゃべつてゐたんだ。

僕はない。

放課後に学校内に用事はない。

残つてない。

まっすぐ本屋。

誰も居ない通学路はなんにも邪魔することなく  
そこへ通じてる。

そして「螢の光」が流れるまで立ち読みすんの。  
まだ読んでない漫画つきつき。

毎日来たつて読み切れない。

だから休日は開店と同時に行くんだ。

閉店までいたりする。

夏休みなんていくらでもだね。

だけど、夏休み・・・。

「ひまー

「なんかないー？」

口べせ。

つまんなかった。

テレビ見ても同じ物ばかり。

午前中はアニメもやるけど  
午後は変な番組ばっか。  
つまんない。

友達かあ。

小学校はいる前まで  
ひろしちゃんがいた。

いつも僕を誘ってくれてたの。  
いつもいつも。

自転車乗れるようになったのも  
ひろしちゃんのおかげ。

補助輪外してさあ、  
後ろつかんでくれててさあ。

ひろしちゃんは真っ先に乗れてたな。

自転車。

僕はやだつたもん。  
転んだら痛いもん。

なのに一年生の時転校してつっちゃう。

・・・・。

思い切ってクラスの友達んち行つてみた。

一人で。

居なかつた。

いや！

やだやだ。

やだもう、行かない。  
行きたくない。

一人で家にいる！

今日つて14日？

バレンタインだよね？

受験も近いけどみんな氣にしてなくないよね？

気にしない。

僕は気にしない。

気にするなんて恥ずかしい。

そんなとこ絶対見せたくない。

なに？

机、なに？

なんだこの「ソッとしたの。

机の下の教科書入れに入ってるもの。

手触りでわかる。

紙だつて。

包装紙っぽいの。

知らない。

知らんふりをする。

僕は触つてない。

みんなのこころひでなんか確かめない。

最後の授業まで通した。

・・なにこれ？

なこげなーくを装つてしゃがんでみたの。  
しゃがんで見たの。

包装紙だ。

クシャつて丸まって。

いたずらだらりつてわかる。

馬鹿な男子がやったんだろうか。

でもそんなことよりがつかりの方がちょっとだけ大きかった。

松田！

なにあまえー？

朝賀さんが気にしてゐるつまー。  
でも松田は気にしてないつまー。

松田。

「へくたらじー。

一年生の時からへくたらしかった。

別の小学校から上がってきたあい。

「おまえ暗い

なんでそんなことなんてわかんないの！？

もしうまつと人に氣をつかないよ？

言われていやなことなんてわかんないの！？

ビリにあるのそんな堂々とした血信！

僕は腹が立つて腹が立つて。

ほかの男子とまくしゃつてるあいつが

理不眞で理不眞。

あいつもいた。あいつもいた。

あいつもいた。

勉強はできないなど

ぽひつしておどけた感じ。

女の子にもかわいがられてる?

そつー

隣の兼沢さん！

僕とは席を離して無視してたつぱ向への  
あきちゃんとはよくしゃべる。

あけちゃんは僕の後ろの席なのに。

腹立つな。

差別だ差別。

でもあきちゃんは差別しないもーん。

ほんと、優しい。

雅くん、

背の順でも低い方の僕より  
もつと小さい。

顔も子供みたいだし。

かわいいよね。

いいなあ。

あんな感じならもてるのかなあ。

学生服も体より大きい感じ。

丸顔だし髪さらさらしてるし田も小さいし。

かわいいよね。

いいなあ、かわいい子。

あんな風なら男子にもかばつてもらえるのかな?  
女子にもすぐに好かれるのかな?

かわいいなあ。

かわいい男の子いいなあ。

「お兄さんってできないのー!？」

僕はそれに気づいたときショックだった。

どう考へても僕が長男である以上

これからお兄さんができる可能性はない。

・・・だつてお父さん、遊んでくんないし。  
いつも仕事忙しいし。

・・・お母さんはなんか怖いし。

小さいときなんかね、

僕がいつも家で遊んでると怒るの。  
「外で遊びなさい！」って。

『男の子らしくない』って言われてるよつで、いやだつた。

妹は仲良かつたのになあー。  
部活なんて始めるんだもん。  
遊んでくれなくなつたもん。

お兄さん欲しいよ。

僕と遊んでくれるお兄さん。

僕にいろんなこと教えてくれるお兄さん。

学校のガキ連中なんかと違つて大人のお兄さん。

守ってくれるお兄さん。

初めて高校の校舎入つた。

びきびき。

やつぱりちょっと大人びた雰囲気がする。

難しい勉強をしている所って感じがする。

高校つてなにやるといひなのか  
わかんないけど、  
行くことになつているだけだから  
こつして勉強やつてきて受験してるけど、  
なにがあるのかな。

うまく合格したら春からは  
ここに登校することになるんだな。

こんな、自転車で飛ばさなきゃいけない遠くに。

町内の外に出なきゃいけなくなる。

合格してあとは卒業だけ。

歌の練習なんかして

「巣立ちの歌」？

歌うのは好き。

合唱コンクールとか楽しかったのに。

ほんと、男子は馬鹿。

真面目に歌うのなんかくだらない、

なーんて雰囲氣を出しまへり。

おかげで僕も安心して歌えなかつた。

なんでわかんないツッパリするんだる。  
ほんと、ガキだ。

卒業。

泣くのか？

みんな泣きそう。  
女子なんて。

部活？

恩師？

恩師、かあ。

顧問の先生、

美術の先生だつたけど、

「一度くらい本気になれっ」

授業でも怒られたことなかつたのに。

担任の先生にも怒られたことなかつたのに。

だって僕は優等生だもん。

怒られるなんてそんなへマしません。

先生は優等生好きでしょ？

理科の先生、

僕の、合っているはずのテストの解答、  
丸付けてくんなかつた。

すんごくむかついた。

記述問題は得意じゃないけど、  
だけど僕の答えそんなんに間違つてないでしょー！？  
いいじやん、丸付けたって！

思わず口に出した。「あこつむかつく」

したらクラスのツッパリくん寄つてきた。

「だよな」って。

だよな、って、きみと一緒にしないでくれよー！  
僕はもうとレベルの高い所で腹立つてるんだ。

でも、なんできみ、話しかけてきたの？

美術の、

美術部の、先生。

くやしかつた。

そりいえば・・・むかつかなつた。  
怒られたのに。

式が終わつた。

卒業証書はこのあと

クラスで先生からもらつんだ。

みんなと離れて校舎をぶらつぐ。

これ・・・僕の絵。

美術部員の文化祭の絵。

どうなるのかな。

戻つてくるのかな。僕の初めて描いた絵。

去年の夏

まだ受験を気にしないでいられたとき  
机の上に広げたキャンバス。

窓の外に見える雲を描いた。

青くておつきくてそこにもくもくと白。

青一く塗つて、白一く塗つて、  
下に適当に屋根とかいろいろ描いて。

でも描いたんだ。初めて。

兼沢さん？！

「卒業だね」

え、なんで普通に話しかけるの？  
ずっとそっぽ向いてたのに。

「今までじめん

僕の言葉。

どうしてだろう。

向こうのセリフじゃないの？

どうして僕、そう言つたんだろう。

中学時代、か。

あの漫画で見てたら

「とっても青春！」ってイメージなのにな。  
期待はしてたのにな。

漫画とは違うな。

僕、トイレ行かなかつたもんな。

嘘。

行つてた、こつそり。

「おしつこする姿想像できないー！  
なんて言われてた僕。

そりゃそうだよ、がんばって  
そつじてたんだもん。

僕は特別。

そんな姿見せない。

だつて優等生だもん。

みんなと同じことなんてしないんだ。

入学してすぐ手に入れたんだ、

「特別」のレッテル。

特別だから同じことしない。

できない。

・・・みんなは漫画の中のよつな

青春送つた？

喧嘩したり  
恋愛したり  
誤解したり  
一緒に笑つたり  
泣いたりした？

卒業証書。

一人一人担任の先生からもらつた。

これで、最後があ。

「よーし、最後に黒板にみんなで書こかー」

大盛り上がりだ。  
殺到してゐる。

うん、僕も行きますか。

押される。

すつころがぶ。

筒が落ちる。

僕の卒業証書。

机からこぼれる。

「ヒヒ、取ーり！」

「あたしんとこ取らなイドー

みんな争奪戦してる。  
黒板に群がってる。

見上げる僕。

転がる筒。

こぼれ落ちた僕ら。

「おまえ書かないんだ？ ライバル減りいー

・・・松田？

奴は背の高さを活かして上方をでかでか取る。

書かないなんて言つてない  
みんなにはしゃいでんだ

出遅れた

もう書くとこない  
いいや、べつに

大文字が踊る。

「友情！」

「努力！」

黒板の上半分が真っ青真っ黄色に彩られた。  
喜色満面の男。

ふ、ふざけ・・・

「松田あつ」

筒を取る。

机に戻す。

赤チョークをつかみ  
群れへと突っ込む。

いの口ぼくは十五歳になつた。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6058d/>

---

ロー・ティーン

2010年10月10日06時10分発行